第３章　研究ノート・提言

教師を目指す学生に伝えたい実践力④
－「教師力」向上のための４つの視点！－

辻　　誠一[1), 2)]

教師を目指す学生に伝えたい実践力④として、宮城県特別支援教育センターの広報誌であった「燦々」に著者が寄稿した提言『「教師力」向上のための４つの視点！』を紹介する。さらに著者の38年間の教職生活から感じた特別支援学校の教師に必要な「教師力」（授業力・学習指導案作成力・伝達継承力・仲間力）について、現在の教育情勢や教育現場の現状から再考し、「研究ノート・提言」としてまとめたものである。

キーワード：実践力、教師力、授業力、学習指導案作成力、伝達継承力、仲間力

1．はじめに

東北福祉大学特別支援教育室「研究年報第10号」（2018.3）では、教師を目指す学生に伝えたい実践力③として、月刊誌「特別支援教育の実践情報」（明治図書．2013.5）の論説に著者が寄稿した「初めての特別支援教育担当・準備のための最初の心得－はじめての指導法理解の基礎・基本願」の原稿を基に、４月から教壇に立つ学生のために、実際に役立つ障害のある子ども理解の方法や学級づくり・授業づくりの大切な視点をまとめ紹介した。

今回は、教師を目指す学生に伝えたい実践力④として、宮城県特別支援教育センターの広報誌「燦々」（図1）に、センター所長としての立場で、宮城県内の特別支援学校や特別支援学級に携わる教師に、著者が寄稿した巻頭言を紹介し、その当時の教育現場（特別支援学校）の現状や著者の想いを振り返り、38年間の教職経験から学んだ著者の考える『「教師力」向上のための４つの視点！』を、時代の流れに合わせ、教師を目指す学生の今後に役立つよう再考し提言する。

図１　「燦々」

１）東北福祉大学教育学部教育学科
２）東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

2. 宮城県特別支援教育センター広報誌「燦々」より[1)]

まず、本論を進めるに当たり、宮城県特別支援教育センターの広報誌であった「燦々」(2010.6) の巻頭言に著者が寄稿した『「教師力」向上のための4つの視点！』の巻頭言・原文を紹介する。

「学習指導案は、教師としての力量を写しだす鏡である。」

この言葉は、当センターが刊行した「特別支援学校・教師のためのサポートブックⅡ・学習指導案を書こう」(以下「サポートブックⅡ」とする。) (2010.2) の挨拶に引用した言葉である。

従来の特殊教育が特別支援教育へと大きく姿を変え早くも4年目 (2010当時)。

インクルーシブ教育システム構築を目指し、幼・小・中・高等学校ばかりでなく、社会における発達障害に関する特別支援教育への意識や理解の充実はかなり進んできている。

しかし、専門性の高いはずの特別支援学校の現状はどうだろう。

サポートブックⅡの作成作業等から見えてきた「教師力」向上のための視点について、著者の経験から、これからの特別支援教育を担う学生へ期待を込め、4つの視点を述べる。

【視点①・授業力】

毎日、各種会議や事務処理に追われ、日々の授業が、工夫も何もない流されたマンネリ化した内容になっていないだろうか。

確かに学校現場は忙しい毎日だが、教師にとって一番大切な仕事は、日々の授業を充実させることだと考える。

遠い昔、先輩も後輩も関係なく、同じ教師 (仲間) として、「良い授業とは！」「分かりやすい学習指導案とは！」お互い議論し合い、切磋琢磨しながら教師の力量を磨き合ったものである。

「時代が違う！」と言われそうだが、形は違えども職場の中に話せる場、刺激し合える場があるかどうかが大切である。ぜひお互いに指導技術を吸収し合い学び合い「授業力」を高めてほしい。

「授業力」とは、実態把握力、説明力、指導・支援力、板書力、教材・教具開発力等々、多岐に渡っているが、まずは教師自身が、授業の準備や授業そのものを楽しむことが大切である。

【視点②・学習指導案作成力】

学習指導案とは、その授業の計画書であり設計図である。教師にとって、しっかりした学習指導案を書く訓練をすることは、指導の方向性を明確にし、物の見方や論理性を身に付けることができ教師の専門性を向上させる。

当然、学習指導案中の文章は、主語述語がしっかりし、短くシンプルにということであり、見やすく、誰が見ても分かる学習指導案を作成できる力量を身に付けることが大切である。

【視点③・伝達継承力】

「不易と流行」の言葉のとおり、いつも最新の教育の流行に敏感になり、教育に最新の情報や手法を採り入れることは当然大切である。しかし、過去の実践を見直し継承していくことも大変重要な仕事である。

特に特別支援学校の現状を見ると、昔からの教育財産を掘り起こし、今に生かすことが必要である。先輩教師が苦労して残した現在でも役立つ素晴らしい校内研究や指導内容表、工夫された教育課程や教材・教具が残っているはずである。

昔を知り、新しいものを創造することこそが、障害児教育の基礎・基本に繋がる。さらにはそれが、現在の特別支援教育を充実させ、子ども個々の実態に合った教育課程の編成や研究方法を学ぶことに繋がる。

【視点④・仲間力】

新学期、先生方の一番の関心事は、どの職場でも担任発表であり、どの先生と一緒に仕事をするか！という学級や学年、学部組織の人間関係である。

これも仕方のない現実だとは思うが残念でならない。「仲間づくりが教師力を高める」の言葉どおり、教師自身こそ、組織の中でのコミュニケーション力を高め、互いの得意分野や良さを知り、協同作業ができる心の広さが大切である。

最後に、特別支援教育の充実・発展の鍵は、子どもたちも教師も元気いっぱい・魅力いっぱいの特別支援学校や特別支援学級である。ぜひ、特別支援教育に携わる全ての教師が、「教師という仕事」に自覚と誇りを持ち、互いに教師力を高め合うことを期待している。

3. 巻頭言へ込めた著者の想い

1) あの当時を振り返って

平成20年4月。著者は平成3年から宮城県の障害児教育の中枢としての役割を果たしてきた特別支援教育センター（南中山）を、建物の老朽化が進んでいた宮城県教育研修センター（青葉山）と発展的統合し、そして新たな宮城県総合教育センター（名取市美田園）を開所するという重い使命を受けて宮城県特別支援教育センター長として着任した。

宮城県では、以前より特別支援学校の教員人事において、小・中、高等学校の教員との人事交流を推進しており、特別支援学校における教員の専門性の向上等が課題となっていた。

また、この時期は、平成19年4月1日「特殊教育」から「特別支援教育」への転換時

期を迎え、宮城県内でも発達障害への理解・啓発に力点が置かれ、特別支援学校の教師の意識も新たな制度である「特別支援教育」に大きく目を奪われていた時期でもあった。

そこで、今回の「燦々」巻頭言では、あえて特別支援学校における教師力の基礎・基本に立ち返り、教師の最大の仕事である授業づくり等について、再確認への自覚を促す意味をこめ提言を行った。

2) 現在の状況から考える教育の不変（不易）

障害児教育の大きな転換期であった平成19年4月1日の「特殊教育から特別支援教育へ」の新たなスタートから、早いもので十数年が経過した。学校現場はインクルーシブ教育システム構築に向け、特別支援教育の充実期に突入し、いよいよ支援が必要な児童生徒についてすべての学校で取り扱うことを明確にした次期学習指導要領（2017）の完全実施を迎えようとしている。

しかし、現在の宮城県における特別支援学校のハード面の現状は、特別支援学校の在籍児童生徒の増加や障害の重度化・重複化・多様化の傾向が顕著に見られ、まだまだ校舎や教室の不足が深刻化している現状である。

また特別支援学校教育のソフト面においても、教師の専門性の向上、仕事量の増加による多忙観等、多くの課題が噴出していることも事実である。

やはりこのような時期こそ、本学の教師を目指す学生諸君には、教師になる自覚を高め、教育の不変（不易）であり、教師力向上の基礎・基本である前述の「燦々」巻頭言を理解し、新学習指導要領の目指す教育を実現できるよう「流行」としての情報や知識をしっかりと獲得してほしい。

4. 現代に応じた「教師力」向上のための４つの視点

いつの時代も教師の一番の仕事は、子ども一人一人に応じた教育的ニーズや実態を的確に把握し、日々の授業を充実させることである。

そこで、前述した「燦々」（2010.6）巻頭言を基に、教師を目指す本学の学生に期待を込め、教師力（授業力・学習指導案作成力・伝達継承力・仲間力）について、現在の教育現場の「不易と流行」の現状から再考する。

1) 視点①・授業力について

著者が以前、勤務していた宮城県特別支援教育センター所長時代（2010）に、若手指導主事と一緒に「サポートブックⅡ」を作成し、その中で「授業力」を次の「4つの力」に整理した。

① 子どもを理解する力

子どもたちの発達の段階や障害特性を理解し、子どもの行動をしっかり観察し、その行動に意味付けをしていく力

② 指導・支援の在り方を計画し、改善する力

子どもの発達や生活経験，障害特性を踏まえて、指導計画を作成する力。授業を振り返って改善する力

③ 教材・教具を開発する力

子どもの力を引き出せる教材・教具を探求し、開発、改善していく力

④ 授業を展開する力

授業の流れや場を構成し，計画どおりにいかなくても，子どもの行動や反応に応じて授業を構成しなおしていく力

以上の「4つの力」は不変（不易）であり、教師を目指す学生は当然のこと、いつの時代も全ての教師が身に付けてほしい力である。

また教育現場では、学習指導要領の改訂（2017告示）が行われ、新たな教育課程の在り方や授業づくりの方向性が示された。当然、特別支援学校でも全教員がこの改訂内容を理解し、その情報内容に敏感でなくてはならない（流行）。

図2「学習指導要領の改訂の方向」のとおり、文部科学省が示したこれからの授業づくりにおいては、これまでの授業づくり以上にさらに子どもの視点に立ち、日々の授業を通して、子どもたちが①「何ができるようになるか」②「何を学ぶか」③「どのように学ぶか」を意識し、目標を明確にした授業づくりと展開が必要になってくる。そのためには、授業づくりの基礎となる「教育課程編成」の理解が重要となる。

教師を目指す学生においては、新学習指導要領の方向や内容の理解は当然であり、さらに学びの連続性を意識した教育課程の編成の在り方や社会に開かれた教育課程の編成の在り方までを理解し学びを深めてほしい。

図２　学習指導要領改訂の方向[5)]

2)　視点②・学習指導案作成力について

学習指導案は、従前のとおり授業を展開するための計画書であり、授業づくりには欠かせない設計図である。

「学習指導案は、教師としての力量を写しだす鏡である。」

この言葉どおり、教師にとって学習指導案の作成力を高めることは、教師の専門性を向上させ、教師力を高める重要な資質の一つである。

本学の学生にとっても、新任教員として４月から教育現場に立つ場合、初任者研修指導教員から、毎日指導され提出を求められるのが、この学習指導案の略案及び細案である

当然、学習指導案中の文章は、独りよがりにならず主語述語がしっかりし、短くシンプルであり、見やすく、誰が見ても分かる学習指導案を作成できる力量を身に付けることが大切である。

著者の考える学習指導案の持つ役割には、次の３点があり、学習指導案作成に当たっては十分に意識する必要がある。

●参観者のための学習指導案

学習のねらいや教材解釈・計画・支援の工夫・学習の流れ等を参観者に、より良く理解してもらう役割。

●Ｔ・Ｔ同士のための学習指導案

チーム・ティーチング（Ｔ・Ｔ「複数担任制」）での授業の場合は、題材や支援の方法・

役割分担を共通理解する　ための大切な計画書としての役割。

●教師自身のための学習指導案

年に一度でも計画された細案を書くことは、自己満足になりがちな教師という仕事に自己評価と反省を与え、教師としての力量を高める役割。

学習指導案の形式に関しては、子どもたちの障害や扱う教科等により違いが見うけられる。また、各都道分県でも大きく形式が違い、同じ県内であっても各学校による形式の違いは避けられない。

しかし、特別支援学校における学習指導案作成では、特に次の４点が重要である。

○子どもたちの実態や教育的ニーズから出発していること

○子どもたちの姿が見え、目標や評価の観点が明確であること

○教材・教具や指導・支援の工夫がなされ、明記されていること

○誰が見ても・読んでも理解しやすいこと（独りよがりにならない）

3）視点③・伝達継承力について

38年間の教職経験から感じることは、現在でも大いに役立つ過去の素晴らしい教育財産（研究、教育課程、教材・教具、指導内容表　等）が見向きもされず、埋もれてしまっているという現実である。

ベテラン教師の役割は、この教育財産を掘り起こし今に生かし、次の世代に継承していくことである。また若手教師は、教育財産から障害児教育の基礎・基本を学ぶことが大切である。

著者にとっての教育財産は、昭和54年度当時、養護学校義務制の開始を見据え、一年前の昭和53年度に宮城県立光明養護学校重複部の先輩教師三名が、先行実践としてまとめ上げた指導書『重度・重複障害児の教育「もくれん」』（図3）である。あの当時から40年経過した現在でも、何ら色あせることなく、指導・支援の視点が明確に示されていることに驚かされる。

図３　「もくれん」[6)]

教育財産を掘り起こし、築かれた伝統に胡座をかかずマンネリ化しない意識や「不易と流行」から多くを学ぶ意識が大切である。

4) 視点④・仲間力について

子どもたちは、教師によって変わり、そして、学校も教師によって変わる。

特別支援学校での教育は、チーム・ティーチング（T・T）での授業が中心となり、同僚との信頼関係（人間関係）が大切であり「仲間力」が重要となる。

特に特別支援学校は、いつの時代もチーム力が問われ、「チーム学校・チーム学部・チーム学級」を形成する「仲間力」が大切となる。

そのために教師を目指す学生諸君には、特に下記のような教師を目指してほしい。

○子どもや保護者、そして同僚にも信頼される教師
○同僚と協力し共同・協働作業ができる教師
○課題・提出物（宿題）の期日を守り、しっかりと取り組む教師
○仲間力を高め「プロの教師」になるための「3つの㋮」を持つ教師
①やさしい目　②するどい眼　③するどい眼

5. おわりに

本学では、多くの学生が教員採用試験に合格し、この4月から新任教員として実際の学校現場に配属されていく。ぜひ今回の『「教師力」向上のための4つの視点！』を参考に各自が教師力を高め、社会人として教師として大きく成長することを期待している。

参考・引用文献

1）辻誠一『「教師力」向上のための4つの視点！』，宮城県特別支援教育センター広報誌「燦々」提言，2010.6

2）辻誠一著「改訂・特別支援教育のコツと技」，日本文化科学社，2008.4
※2015・4月　フィリア出版より再版

3）辻誠一著「実践・特別支援教育テキストブック」教育開発研究所，2017.4

4）「特別支援学校・教師のためのサポートブックⅡ学習指導案を書こう30のポイント」，宮城県特別支援教育センター，2010.2

5）文部科学省HP「新学習指導要領の方向性」，2017.4

6）重度・重複障害児の教育「もくれん」宮城県立光明養護学校，1979.3